

side-A

シキ雪 (雪の襲い受け)

3～ 8

side-B

雪シキ

10～15





シキが雪に迫られ強引に関係が結ばれたあの夜以来、それは一度きりでは終わらず続けられていた。その度にシキは拒むが、力負けて受け容れざるをえない。そんなことが毎日のように繰り返されてきた。望まぬことにも拘わらず、慣れさえ生じてきてしまっていた。

その晩も、シキは雪に押し倒され嫌という程愛撫を受け舐められていた。それはいつも通りのことで、また力尽くで抱かれるのだろうと諦め混じりの気持ちでいた。その筈が。シキの腰の上を雪が跨ぎ、直後に重みと、つい先程まで雪の舌が這っていたその場所が強く引き絞られるような感覚を覚えた。

雪の体内に飲み込まれている。

「雪、何をいきなり……!」

そして気付き、真剣に雪の目を見据える。

「危ないだろう! 怪我をしたらどうするんだ!」

「フ……、ハハッ」

不意に笑い出した雪の意図が分からない。

「何を笑っている……」

雪はシキの視線を真正面から受け止めて答える。

「兄さんは俺にこんなことされるの嫌だと言ってるのに、勝手にこんなことされてまで心配してくれるんだ……叱ってくれるんだね」

雪の行動と台詞に似合わず、語尾はとてもやわらかな声だった。

「当たり前だろう、おまえは……」

「俺は？ 兄さんの……何？」

「……………家族だからだ」

「フフ……、やっぱり兄さんはどこまで行っても兄さんだね」

雪がひどく優しい眼差しを向けてくる。

「大丈夫、ちゃんと準備してきてるから」

そう言われてみれば、あっさりと滑るように飲み込まれたと先程の感触を思い出し、シキはとりあえずの安心をする。

雪は笑顔のまま、満足気な表情に見える。

それにしても、こうも突然にして痛みは無いのかと、尚も心配が残る雪の様子を窺っていた。

「俺の初めては全部兄さんに捧げるって決めてたんだ」

「勝手だな……」

「兄さんのこと、気持ち良くしてあげるから」

言い終わらぬ内に雪は動き出す。

体を揺らす雪の下で仰向けに身を投げ出したまま、シキはなすがままでしかいられなかった。

「兄さんの、中で大きくなってきた……深くまで……嬉しい……」

雪が漏らしたうわごとのようにシキの興奮は高まってきていた。生理現象だから仕方が無いことだ。ところが雪は動きを止める。

シキは訝しく思うものの、雪はしばらく固まったように動かなかつた。強い刺激が途絶えて、徐々に鼓動と熱ばかりを意識させられてしまう。

「中で兄さんのがドクドク脈打ってる……興奮してるね、もう出したい？」  
感じていたそのままを言葉にされて悔し紛れに返す。

「おまえが興奮しているんだろう」

「こんな状態で隠せると思ってるの？ 繋がってるから、わかるよ兄さん」

シキは沈黙して答えない。

何を思ったか雪はシキの上半身をぐいと引き起こすと、抱きかかえて横に倒れた。視界が中途半端に回ったと感じたら、シキは雪に覆い被さる体勢になっていた。

「兄さん、動いて！」

雪が期待の眼差しで見上げてくるが、シキは動けない。

「ねえ兄さん、動いて、お願いだよ。動かないといけないよ」

「構わない、自分で処理する」

実際のところは、だいぶ煽られて目の前の欲を手放すことを惜しむ気持があった。だからといってこれ以上言いなりになりたくもない。少々の無理を押ししてシキは拒絶を示した。

「兄さんがいくまで離さないよ」

雪は両足をシキの腰に絡める。

やはりシキは動けない。

「……俺の顔が見えない方がやりやすい？」

シキは尚も動けない。体を後ろに引けばいい、それだけだというのに。

しかし逃げ出そうとしたところで、すぐに捕まえて引き戻されることが予想されて、もはや逃れる気力が起きなかった。

暫しの後、シキはぼつりとこぼす。

「私が動いても、おまえは気持ち良くならないだろう……」

雪は軽く噴き出して笑う。

「ハ……ハハッ、アハハッ………何言ってるの、兄さん！俺は兄さんのを受け入れただけでいきそうになるのを、我慢するのに必死だったんだよ。今だっつてずっと耐えてる……」

…兄さんに先にいつて欲しいから」

雪はシキと視線を合わせると、目を細めて笑った。

「兄さん、お願い……」

一瞬、雪の態度が可愛らしいと思ってしまった。

或いはほだされてしまったのかも知れない。

「雪、目を瞑っている……」

「うん」

言われた通りにして雪は答えた。その声は弾んでいた。

雪に無理矢理に始めさせられたことだ、それにここまで来て今さらだろうという、半ば自棄な思いでシキは動き出す。

慣れぬ事でぎこちない動きだったが、雪は喜び全身でその感情を表した。

雪はそつと動きを合わせながら言う。「嬉しい、本当に嬉しい……」「兄さんが動いてくれて、兄さんが気持ち良くなってくれるなら、嬉しい」そして、シキのことを好きだと。

喘ぐ声と交互に、そのようなことを何度も何度も口にした。

雪の中はきつく締め付けられながらも、よく滑り、熱く、シキに強い快感を与えた。

今までは、雪はシキを力で捻じ伏せた上で好きなようにしていた。シキが快楽を得ることを何よりも嬉しそうにしていたが、まるで雪の思う儘だった。シキの意思などお構い無しに。

シキよりも背は低いが鍛えられしつかりと筋肉のついた体だ、背はあっても細く力の弱いシキは、兄としても男としても尊厳は形無しだった。それが今、雪はシキの下になり身を任せてきている。こんなにも喜んでいる。その姿は昼間の弟の姿を思い起こさせた。従順でひたむきにシキを慕ってくる歳の遙かに離れた弟の姿を。

本능が満たされ、次第に体も頭も気持ち良さしか感じなくなってしまう。抗えぬ感覚に酔い、理性を保てなくなる。

雪が薄目を開けて自分を見詰めていたが、もう構わなかった。

程なくして脳から強烈な波が体の中を駆け降りてきた。

「兄さん、中に出してっ……」

シキの昂ぶりを察したように雪がねだる。

興奮が高まり後に引き難くなっていた。雪に請われたことで背中を押され、自らの衝動に従う形となった。ほんの数秒の筈なのに果てのないような開放感で前後を失いそうになる。

雪もシキを追うようにのぼりつめ、背を反らせて爆ぜさせた。熱い迸りがシキの胸を叩いた。

そんな雪の姿を見て、冷えつつあるシキの頭の中に再び昂揚するような感覚と満足感が掠め、消えていった。

雪が嬉しい、幸せだと呟くのを耳にしながら、シキは倒れこんだ。どっと疲労が押し寄せてきたのだ。

「ありがとう、兄さん……」

雪はシキを受け止め、強く抱きしめた。

「……兄さんが上になるんだったら、またしたいって思ってくれる？」







エデン科学研究所長室にて。

その日、シキは自分の机の前で苛立っていた。

仕事が一向にはかどらない、集中力が上がらない。

常ならば処理出来ているだろう案件の半分も終わらぬうちに、午後を迎えていた。朝から休憩を取っておらず、先程コンソールを操作しながらカプセルを数個口にしたのみだった。

思うように行かないことに緊張してか、首筋から頭部に掛けて痛みが発生していた。深く息を吸って仰のく。

こんなことになったのは昨夜の雪の所為だった。

思い出しては腹立たしさがぶり返す。

深夜、いつものように雪は訪れて。昨日に限って執拗に煽られて焦らされた。雪は道具まで持ち出してきた、まったくいつの間にあんなものを用意したというのだ。

玩具などで煽られたことが、許せなかった。

その後抱かれたが、雪は尚も焦らす事を止めなかった。シキの興奮を高めては手放し、刺激を途絶えさせる。

あまりのことに耐え切れなくなり、思わず自分から動いてしまった。だがすぐに阻まれ、そんなに俺を欲しいのかと嗤われた。悔しさに震え、羞恥と怒りのあまり泣きそうになった。

明け方近くまで散々に颯られた。

……そうだ、睡眠不足と疲労もある。集中力が出ないのも当然だ。

今までだって雪とそういうことになることはあった。雪が強引にするのだ。

異常な関係に陥った最初の頃はともかく、今では少なくとも仕事には障らず、生活のペースを維持できるようになっていた。雪に腕力で適わないこともあり、然りとて手段を選ばずに止めることも出来ず。結局、問題を先送りにしていた。

しかし昨日の振る舞いはあまりにもひどかった。

行為が終わってから、今朝も、雪と口をきかなかった。

一切の無視を決め込んだ。

雪は任務に出掛け、自分も研究室へ赴き、普段通りに過ごそうとしていたのに。

日常を乱し、苛立たせる原因は雪だけにあるわけではなかった。日々、体は意志に反して快楽に流される。慣れること無しには心身が持たないだろうが……。雪と仲違いの様な状態になっていることも気に障る。弟に怒りの感情を抱き続けたくはない。仕事の効率を落としていることも情けなく感じる。それらの尖った感情は自らへ向いていた。

何故こんなに心を動かされなければならぬ。

これが弟の感情の強さ故なのだろうか。弟の好意そのものを思うわけではないが、人の情念は度し難く、煩わしい。

関係を変えてから、雪は不満を口にするのが多くなった。我が儘も甘えも一層増えた。

日々の暮らしの中で些細な不満や文句は当たり前前に存在するものだったが、最近の雪のシキに対する不満は理不尽さを感じさせた。

満たされず自分ひとりで解決できないのならば、兄として力を貸してやりたい気持ちはあった。然し雪にとってそうであるように、シキにさえもどうすればよいのか答えは見付られずにいた。

シキは夜更けまで研究室にこもっていた。進みが悪く、予定していた分の仕事が終わらなかつたのだ。それに加えて、家に帰る気分ではなかつた。自分が帰らぬことを雪は気にするだろうか。

案の定、雪は研究室に姿を現した。

勝手に中に入り、しばらく扉の前に立ってこちらを見ていたが、シキは机上の資料に視線を向けたまま、顔を上げなかつた。

「兄さん……まだ帰らないの？」

声を掛けられても無視する。

雪は落ち込んだように下を向いて、それ以上は喋らずに部屋の片隅の椅子に座った。仕事をやるシキの姿を見て、項垂れて、また顔を上げてシキを見て、そんなことを延々と繰り返していた。

雪の態度が全く気にならないわけではなかつた、多少の苛立ちを覚えなくてもなかつた

が、作業をしていると存外に意識せずにいられるものだ。

日中よりは気分が落ち着いたせいかわ仕事は進み、キリのよいところまで仕上げられたのは雪がやってきてから1時間強というところだろうか。

コンピュータをロックして白衣を脱ぎ、靴を手に研究室を出ようと扉へ向かった。

「兄さんっ！」

雪はすぐに気付いて立ち上がる。

「兄さん……兄さん！」

振り返らず扉に手を掛けようとしたが、その手を掴まれ止められた。

雪はそのまま動きを止めて固まった。シキの腕も強く握られて動かせない。

「兄さん……返事して、なにか言って！」

振り返って、ただ雪の顔を見下ろす。

視線が合ったものの雰囲気の高さを感じたのか、雪は顔を強張らせた。

「怒ってるの……？ 昨日のこと……」

分かっているようじゃないか。

「……ごめん、俺謝るから、だから返事して、兄さん！」

溜息をひとつついて、靴を下ろした。

「謝るようなことなら何故した？」

「俺……俺は……」

「私をおまえの良いうようにして、悦んでいたのか？」

「違う！ 俺は……兄さんに求めて欲しかったんだ」

どれほど想われようと、シキは雪を弟としてしか見る事ができない。そういう対象ではないのだ。

「……何度も言っただろう、無理だ」

「うん……」

雪の目に涙がこみ上げ、潤んで光る。

「分かってる、難しいんだって……でも俺は諦められない。気持ちが無理ならせめて欲求だけでも……」

それであるようなことをしたというのか。雪の自分に対する行動はあまりにも必死で、寧ろ躍起になっているようだった。それが雪のためになるとは思えなかった。

「そうしておまえは満足するのか？」

雪は俯いて首を横に振る。

「その時は良かった……だけど後悔、いや……」

恐らくだが、雪の感じていることは虚しさだろう。

「兄さんに嫌われたくない！ 俺のこと、嫌わないで……」

「嫌ってなどいない」

とうとう雪の目から涙が一筋零れ落ちる。

「本当……？」

「ただ、私の気持ちもある。おまえの我ばかりを通そうとせず、少しは折れてくれないか」  
雪の気持ちには応えられないが、家族という繋がりは何よりも深いものだとしきは思っている。

そんな気持ちでいつも雪のことを見ているというのに。

「雪、おまえのやっていることはおかしい」

「うん……俺おかしいんだ、兄さんに対しておかしいんだ」

両腕を掴まれる。雪の体の震えが伝わってきた。

「兄さん、助けて……俺を治して！」

雪はぼろぼろと涙を零して訴える。

「そんなに泣くな……」

おまえの悲しむ顔など見たくない。

泣かれては、慰めるしかなくなってしまうだろう……

これではまるで私の方が加害者のようではないか。

手を差し伸べれば、また雪は調子に乗るかもしれない。

それが解つていても、どうしても放っておくことが出来なかった。

